



エルンスト・ユンガーの対抗近代主義 その内容と展開

野上, 俊彦

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2020-03-25

(Date of Publication)

2021-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7642号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007642>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(別紙様式3)

論文要旨

氏名 野上 俊彦
専攻 グローバル文化
指導教員氏名 上野 成利

論文題目 (外国語の場合は日本語訳を併記すること)
エルンスト・ユンガーの対抗近代主義 その内容と展開

論文要旨

本稿の課題は、20世紀ドイツの作家エルンスト・ユンガー(1895-1998)の最初期から最晩年までの主要諸著作を、対抗近代主義という主題に則して一貫的に読解し、その内容と展開の様子を明らかにすることにある。

対抗近代主義は、R・ヘルツィンガーがヴァイマル時代のドイツ保守革命思潮を評して用いた概念であり、ユンガーを含む当時の近代主義的なドイツ・ナショナリストたちが、西欧式の近代化に対抗してドイツ式の「正しい」近代化を推進しようとしたことを指している。

本稿はヘルツィンガーのこの概念を借用しつつ、[1] ユンガーにおいては対抗近代主義がヴァイマル時代のみならず最晩年(1990年代)まで継続される思想的モチーフになっていたこと、[2] 彼の対抗近代主義はナショナリズムの枠組みに収まらないこと、[3] 彼の対抗近代主義の最も根本的な企図が「神の死」に伴う人間の死や生の意味喪失という問題の克服にあること、を明らかにする。

こうした課題設定の背景は、ユンガーの統一的な思想像の不在という、研究史上の不足である。ユンガーは政治的ナショナリスト的文筆家からやがて無政治的・芸術家的な文明批判論者に変容したと理解されてきたが、その政治的な側面と無政治的・芸術的な側面とが別個に論じられるのが通例であり、両側面を繋ぐ統一的なユンガー像は出されていない。たとえばユンガーの長い著述歴から見れば、彼がナショナリスト的文書を書いた時期は最初のわずか8分の1の期間を占めるにすぎないので、彼の政治的側面を重視する研究は、残り8分の7の期間の作品に関心を払わないことが多い。ユンガーのテクストのこうした取り扱いによって、なるほどそれ自体としては説得的な議論が展開されるものの、彼の作品・思想の全体像が明らかにされたとは言えない。また彼の無政治的・芸術的な側面を重視する研究では、後年の洗練された言語芸術家としてのユンガーのイメージに引きずられて、初期の政治的文書が時代の加熱した雰囲気にも煽られてしまった本質的に無政治的な芸術家の若書きと見られる場合もある。しかし本稿の見立てでは、ユンガーは初期の政治的文書の中で培った「西欧式の近代化が現代世界の混迷を招いた」という批判的認識を終始保持していたのであり、それは後年の作品のうちにも窺われるのである。

ユンガーの諸著作を対抗近代主義という主題に則して読み解く本稿は、研究史上のこうした不足を補う意図をもっている。ユンガーは1930年代初頭にドイツ・ナショナリズムからの脱却を模索し始めるが、それ以後も所与の西欧式の近代化に対抗して「別の近代」(T・ロークレーマー)への到達を模索している。その立脚点はもはやドイツ国民でなく、一人彼自身にまで縮減している。つまり彼は西欧式の近代化をドイツ式のそ

れで是正しようというのではなく、ドイツをも毒してしまった西欧式の近代化過程に身一つで対抗するという姿勢を示しているのである。

また本稿は、上述の課題への取り組みを通して、研究史における「ニヒリスト」としてのユンガー観にも修正を加えることになる。K・レーヴィットによるユンガーの「能動的ニヒリズム」批判論(1935年)およびC・クロコウによる「決断主義」批判論(1958年)以来、ユンガーは「伝来の諸価値の一切を懐疑し、絶望的な虚空の中で、生に束の間の充溢をもたらす非合理的行動に邁進することを勧める刹那的な行動主義者」であるという理解が一般化した。しかしユンガーの対抗近代主義の内容と展開を追跡してゆくと、ユンガーがむしろ[a](科学知と技術力の拡大・向上を背景とする)神からの人間の離反、この離反の帰結としての人間の死や生の揺るぎない意味の喪失を、西洋的近代化の最も深刻な問題と捉えていたこと、[b]この問題が克服された「別の近代」、すなわち死や生に意味を与える神性の実在の確信が共有された社会への到達を企図していたこと、[c]その際、(前近代的世界への単なる先祖返りを志向するのではなく)近代的な科学知を受容した上で、それによる懐疑にも耐えうる新しい絶対的の神性を発見しようとしていたこと、などが判明する。これらの点に照らすと、ユンガーは伝来の諸価値の単なる否定と破壊の唱道者でも非合理的な陶醉状態の耽溺者でもなく、むしろ絶対神を中核とする前近代的社会秩序への憧憬者なのであり、彼の対抗近代主義は、[1]そうした社会秩序との惜別、[2]近代化した世界における新しい神性の到来の切望、[3]そのような神性の不在の時期の耐忍を、身をもって提示する教説となっている。

論文審査の結果の要旨

氏名	野上 俊彦		
論文題目	エルンスト・ユンガーの対抗近代主義 その内容と展開		
判定	合格 ・ 不合格		
論文チェックソフトによる確認	<input checked="" type="checkbox"/> 確認 <input type="checkbox"/> 未確認 理由:		
審査委員	区分	職名	氏名
	委員長	教授	市田 良彦
	委員	教授	上野 成利
	委員	教授	松家 理恵
	委員	准教授	石田 圭子
委員			印
要 旨			
<p>■本論文は 20 世紀ドイツの作家エルンスト・ユンガー (1895-1998) の思想を検討の俎上に載せ、その最初期から晩年にいたる思想の形成と展開を〈対抗近代主義 Gegenmodernismus〉という観点から一貫的に読み解こうと試みた研究である。もとより〈対抗近代主義〉自体は先行研究 (R・ヘルツィンガー) が提起した概念であり、本論文独自の道具立てではない。ただし先行研究では〈対抗近代主義〉は (ユンガーを含む) ヴァイマル期の保守革命思潮の総称として用いられていたのにたいして、本論文はこれをヴァイマル期以後のユンガーの思想をも特徴づける鍵概念として捉え返そうとする。いわゆる保守革命論にみられる〈対抗近代主義〉は、西洋的近代が技術機構の中に人間を組み込んで疎外状況をもたらしているとき、〈国民 Nation〉を梃子にそれを克服しようとする試みであった。本論文によれば、ユンガーも当初そうした思潮に倅さしてはいたが、その後〈国民〉への拘泥を放棄し、地球規模の秩序構想をつうじて (技術 Technik) を人間の意に合う手段へと回復する方途を志向するようになるという。本論文の第一の眼目は、ユンガーを保守革命論の枠組みから解き放ち、近代への両義的な姿勢を含む彼の思想をトータルに描き出すことにある。</p>			

■本論文は序章・終章および三つの章からなり、ユンガーの思想を時系列で追うスタイルをとる。

第一章「端緒：永遠なる全体への憧憬とゲルマン帝国 (1914-1931 年)」では、最初期から 1930 年代初頭までのユンガーの思想が検討の俎上に載せられる。本論文によれば、ユンガーは近代人が〈永遠なる全体的な生〉との結びつきを失った点を (生涯をつうじて) 問題視するが、この時期にあつては〈生 Leben〉が (国民) の生に限定され、それゆえ西洋的近代を克服する方途として〈ゲルマン帝国〉が提示されるかたちとなる。そこには普遍主義的な思考の拡がり十分には認められないという意味で、ユンガーの〈対抗近代主義〉はなお端緒段階にとどまっているとされる。

第二章「確立：生崇拜記念碑としての地球帝国 (1932-1945 年)」では、1930 年代初頭から 1940 年代前半までのユンガーの思想が取り上げられる。この時期には回復されるべき〈生〉は〈国民〉の枠から解き放たれ、万物を包摂する文字通りの〈全体〉として構想されるようになる。それとともに、その崇拜記念碑を建立すべき〈生〉も地球を郷土とする人間総体 (労働者 Arbeiter) の〈生〉へと拡大され、こうして地球帝國的 planetarisch-imperial な労働国家構想が提示される。本論文によれば、ユンガーの〈対抗近代主義〉はこの時期にほぼ確立されることになったという。

第三章「変容：世界国家における平和と自由 (1945-1960 年)」では、1940 年代後半から 1960 年頃までのユンガーの思想が検討される。この時期には (地球帝国) の特徴を引き継ぐ〈世界国家 Weltstaat〉の構想が示されるが、ただし〈地球帝国〉では戦争による淘汰が要求されていたのにたいして、〈世界国家〉では国家間の条約をつうじた統合が重視される。他方、最初期から問題視されていた生死の意味喪失という主題は、この時期に (ニヒリズム) の問題として捉え直される。〈世界国家〉によって諸国民の敵対に終止符を打ち、近代国家の中で損傷された個人々の自由を回復すること、瞑想をつうじて根源的な神性への帰属を自覚することが語られるようになる。本論文では、ユンガーの〈対抗近代主義〉は一定の変容を見せつつも根底では維持されていたとされる。

■本論文ではこのように〈ゲルマン帝国〉 (地球帝国) 〈世界国家〉という秩序構想の変遷を軸にしつつユンガーの思想の展開が提示される。一般にユンガーはヴァイマル期ドイツの保守革命の潮流に連なる思想家と目されたうえで、ヴァイマル期にナショナリズムを標榜していたユンガーがナチズム期以降は政治から距離をとり文学や形而上学的な思弁へと没入するようになる、つまり政治的ユンガーから非政治的ユンガーへと転回を遂げたことみなされてきた。本論文はそうした通説に修正を施し、むしろ〈対抗近代主義〉による近代の超克がユンガーの生涯を貫いていたのではないかと主張する。とりわけ〈地球帝国〉 (世界国家) 等の秩序構想については内外の先行研究でも仔細に論及されてこなかっただけに、この側面に光を当てた本論文の学術的な意義は大きい。

一方、ユンガーはキリスト教 (さらには神性) をどのように捉えていたのか、ともすると前近代への憧憬ともみえる志向、(技術) を人間の意に沿う手段へと回復しようとする志向は、〈別の近代〉を探ろうとする〈対抗近代主義〉とどこまで整合的なのか等、いくつかの論点については説明が十分に尽くされてはいるとはいえない。ユンガーが近代とどう向き合ったのかという問いについては、なお掘り下げる余地が残されている。とはいえ、政治的/非政治的の二分法を排してユンガーの全体像を描き出した本論文は、とくに本邦ではユンガーの思想をトータルに論じたモノグラフがまだ刊行されていない現状に鑑みるならば、高い学術的価値を有していると評価できる。

以上の観点から本審査委員会は、学位申請者の野上俊彦氏に博士 (学術) の学位を得る資格があると認定することとする (なお、申請者は他に査読付き論文 2 編を公刊していることを付言しておく)。